

高度経済成長と山村生活の変化

High Economic Growth and Change of Life in Mountain Villages

湯川洋司

YUKAWA Yoji

- ①高度経済成長のとらえ方
- ②山村の過疎化と高度経済成長
- ③山村の生業と暮らしの変化
- ④「離山」と高度経済成長
- ⑤脱「成長」の生き方

【論文要旨】

日本の山村は、昭和30年代から40年代にかけて大きくその姿を変えたが、その変化は高度経済成長の影響を受けたものと一般的には理解されてきた。本稿では、①高度経済成長期（昭和30～40年代）に山村で起きた変化を確認する、②高度経済成長期を挟むより大きな時間枠の中で高度経済成長時代の変化や性格を捉える、③福島県会津地方・愛媛県西予市惣川・熊本県五木村の三地域を対象にその変化を具体的にみる、という3つの視角から高度経済成長と山村生活の変化との関係を点検・考察する。

昭和30年代以降、山村地帯では人口が減り、また従来が生業がふるわなくなった。これは高度経済成長の影響というだけでなく、たとえば都市の木炭需要が昭和20年代後半から減り始めていたように、山村の生産物が価値を失う時代変化に見舞われていたことが推察される。その空隙を埋めるために、冬の間には都市部へ出稼ぎに出たり土木工事に従事したりして現金を得る生業形態へ移行したことが、この時期の山村生活の大きな変化であった。

この変化は単に山仕事がなくなったというだけでなく、山の中へ入る機会の減少や山の神信仰に象徴される山への畏怖心や敬虔さを失わせ、仕事と心の両面での山離れを促した「離山」（りさん）であった。「離山」は、高度経済成長期の「成長」志向が山村に及んだ結果ともみられるが、この主な要因は山の資源を活用し時代に即した山産物の創出ができなかったことに求められる。

高度経済成長後も山村社会は長らくその影響から抜け出られないまま、現在「限界集落」と言われて未来のない社会のように思われている。しかし、山の原理に即した暮らしの創造をめざし山村らしい生活の再生を図ろうとする住民自身の活動も動き始めている。それらは高度経済成長時代の精神とは異なる志向と手法に基づく脱「成長」をめざすものであり、山村生活の新たな現代的展開を示すものといえる。

【キーワード】 高度経済成長、山村生活、過疎、「離山」、脱成長